

膜シンポジウム 2016が、2016年12月1日（木）～2日（金）の2日間、関西大学100周年記念会館にて開催されました。本シンポジウムにおける発表件数は、特別講演1件、口頭発表23件、ポスター発表68件の合計92件、参加者は176名と、盛況のうちに終えることが出来ました。改めましてご発表を頂きました方々、討論を行っていただいた方々、およびシンポジウムにご参加頂きました方々に厚く御礼申し上げます。

さて今回の膜シンポジウムは、「膜の科学と技術～基礎から最先端まで」という主題で開催致しました。膜研究は基礎と応用が両輪となって連携し、新しい膜材料や分離システムなどの開発に始まり、実際に海水淡水化や二酸化炭素分離などの実用化を目指しています。日本膜学会では、人工膜・生体膜・境界領域と幅広いテーマを対象として、普段同席する機会の少ない研究者が互いに議論を交わしてきました。これまで膜シンポジウムでは1会場で人工膜・生体膜・境界領域の幅広い研究者が一同に集まり、ディスカッションに重点を置いて熱い議論を交わしてきました。膜シンポジウム2016では原点回帰を意識して「膜学会に参加すれば膜の全てがわかる」を目指し、上記のような幅広い主題を設定いたしました。昨年に引き続きまして特別講演を設定し、川崎市産業振興財団ナノ医療イノベーションセンター・東京大学政策ビジョン研究センターの片岡一則先生に「高分子ナノテクノロジーが拓く未来医療～薬物・遺伝子を体内に運ぶ高分子ミセルの開発～」と題したご講演を賜りました。片岡先生は、合目的的に設計した高分子ミセルを薬物ナノキャリアとして利用し、様々な薬物や遺伝子を効率よく運搬するドラッグ・デリバリー・システムを開発されてきました。高分子の基礎科学と直結した高分子ミセルが臨床試験にまで至り、最先端技術として医療ナノテクノロジーに大きく貢献しています。このような基礎と応用が連携した卓越した研究成果は、人工膜・生体膜・境界領域のいずれの研究者にも大きなインパクトを与えたのではないかと思います。

口頭発表では原点回帰を意識して発表時間15分、質疑応答時間10分に設定し、厚みのあるディスカッションが可能となるようにスケジュールを組みました。十分な時間を設定したつもりですが、それでも白熱した議論が多く、時間が足らなかった場面も多く見受けられました。一方、ポスター発表ではここ数年取り入れてきましたショートプレゼンテーションを発表者全員が行った後、ポスター会場に移動してあちらこちらで熱い議論が交わされました。ポスター発表者も慣れてきたのか、1分間という短い時間の中にショートプレゼンテーションをうまくまとめ、ポスター発表への興味も引きつけるように努めていました。素晴らしい研究成果が数多く発表され、ポスター発表68件の中から特に優れた発表に学生賞を授与いたしました。学生賞に関しましては、学生賞選考委員長の中野実先生（富山大）と受賞者の皆様からの学生賞報告が本誌に記載されていますのでご参照ください。

懇親会は関西大学100周年記念会館内のレストランで行われ、68名のご参加を頂きました。まず、会長の高野幹久先生（広島大）からお言葉を頂戴した後、元理事で関西大学名誉教授の浦上忠先生より乾杯のご発声を賜り、懇親会が和やかにスタートしました。途中、恒例の三賞の発表の後、次回の年会運営委員長の岡村恵美子先生（姫路獨協大）と膜シンポジウム運営委員長の中野実先生から開催予告をお願いしました。最後に元会長の中尾真一先生（工学院大）から締めのご挨拶と膜研究者へのお言葉を頂戴し、懇親会を締めさせて頂きました。

今回の膜シンポジウムでは副運営委員長を中野実先生にお願いし、様々な場面での確かなアドバイスを頂きました。また紙面の都合上全員のお名前を挙げる事ができませんが、多くの先生方に学生賞の審査員を務めて頂き、その集計は河村暁文先生（関西大）にご協力頂きました。また学会前日の準備から学会当日の運営までを膜学会事務局の杉山様と関西大学関連の皆さんに快くお手伝い頂きました。ご協力頂きました皆様に心より御礼申し上げます。

次回の年会（早稲田大）および膜シンポジウム（富山大）で再び皆様にお目にかかれることを楽しみにして、今回の膜シンポジウム2016のご報告とさせていただきます。



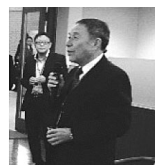
口頭発表風景



特別講演  
片岡一則先生



懇親会会長挨拶  
高野幹久先生



懇親会乾杯  
浦上 忠先生



懇親会締め挨拶  
中尾真一先生



運営委員長閉会挨拶  
宮田隆志先生